

NEXT CONCERTS
》 次回東京定期演奏会

第 **770** 回

サントリーホール

フレトウク 西 耕一氏

2025年5月9日(金)19:00開演 18:30~

10日(土)14:00開演 13:20~

カーチュン・ウォンと巡るアジア紀行
世界的ピアニスト、サー・スティーヴン・ハフも登場!

指揮: **カーチュン・ウォン**
[首席指揮者]

ピアノ: **サー・スティーヴン・ハフ**

芥川也寸志: エローラ交響曲

ブリテン: バレエ音楽《パゴダの王子》組曲

ブラームス: ピアノ協奏曲第1番



©Ayane Sato

©Sim Canetty-Clarke

1回券料金 S ¥9,000 A ¥7,500 B ¥6,500 C ¥5,500 P ¥5,000 Ys (25歳以下) ¥2,000

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

カーチュン・ウォン 編

きき手 八木 宏之

—5月の第770回東京定期演奏会では、芥川也寸志の《エローラ交響曲》、ブリテンの《パゴダの王子》組曲、そしてブラームスのピアノ協奏曲第1番が演奏されます。2024年1月の第757回東京定期演奏会もガムランやアジアをテーマにしていますが、今回はその続編という位置付けなのでしょうか?

シリーズやツィクルスではありませんが、今回のプログラムも「アジア」が重要なテーマとなっています。2025年に生誕100年を迎えた芥川也寸志は言うまでもなくアジアの作曲家ですし、《エローラ交響曲》は彼がインドで得たインスピレーションに基づいて書かれた作品です。《パゴダの王子》はバリのガムランから影響を受けて作曲されたブリテン唯一のバレエ音楽で、私はハレ管弦楽団とこの作品の全曲版をすでにレコーディングしています。そして、私が尊敬するピアニスト、サー・スティーヴン・ハフさんとともにブラームスのピアノ協奏曲第1番も演奏します。この作品にはハンガリーの民俗音楽の要素を見出すことができますし、異文化からの影響という点で、プログラムのコンセプトにも合致して

いるのです。カレーはインドからインドネシアやイギリス、日本に広がり、各地で独自の発展を遂げながら、相互に影響し合っています。音楽も同じように、「東洋と西洋の出会い」が新たな作品を生み出す原動力になっていることを知っていただきたいと思います。

—1958年に作曲された《エローラ交響曲》は、当時最先端であったブルーゼの「管理された偶然性」からの影響を感じさせる、非常にユニークな作品ですね。

《エローラ交響曲》は、芥川の書いたもっとも革新的な音楽であり、彼はこの作品で揺るぎない名声を築きました。一方で、無駄を削ぎ落とした原始的な響きも印象的です。カオスでありながらも整っていくような、あるいは右脳的でありながら左脳的でもあるような音楽なのです。アジアを強く感じさせる作品ですが、ご指摘の通り、西洋のアレアトリー(偶然性の音楽)からも影響を受けています。このように多面的であることが《エローラ交響曲》の面白さであり、なによりの魅力と言えるでしょう。

—《パゴダの王子》は《エローラ交響曲》の前年、1957年に作曲されました。ブリテンは1956年にバリ島に滞在して、現地でガムランの演奏にも触れていますね。

《パゴダの王子》に初めて接したのは、私がまだシンガポールで作曲を学んでいたときのことです。録音を聴いて、本物のバリの音楽かと思ってしまうほどのブリテンの書法に、とても驚きました。ブリテンは西洋の楽器を用いてガムランの響きを再現していますが、そこにはバリの文化に対するリスペクトを感じます。ブリテンの音楽はコロニアリズムでもなければ、表面的な模倣でもないのです。

—今回は全曲版ではなくカーチュンさんの手による組曲版での演奏とのことですが、この組曲はどういった基準で選曲されているのでしょうか?

《パゴダの王子》にはガムランのほかにも、チャイコフスキーやストラヴィンスキーのバレエ音楽を思わせる美しい時間が多く含まれています。全曲版は上演時間が2時間を超え、10種の打楽器と2台のピアノが必要な大作です。組曲版もブリテンがバレエ音楽を書くにあたり大切にしたい要素を余すことなく楽しんでいただける内容になっていると思います。

今回、組曲を作るにあたり、作曲家のコリン・マッシュューズさんにも協力してもらいました。彼はブリテンのアシスタントも務めた経験を持ち、作曲家のことを深く理解しています。マッシュューズさんとはハレ管の仕事で知り合い、彼自身の作品もいま学んでいるところです。

—サー・スティーヴン・ハフさんと共演するブラームスのピアノ協奏曲第1番にも期待が高まります。昨年9月の第400回横浜定期演奏会では、ゲルハルト・オピッツさんとブラームスのピアノ協奏曲第2番も演奏していますね。

ハフさんとは今回が初共演となりますが、とても尊敬しているピアニストのひとりです。ハフさんはピアニストであると同時に、作曲家や詩人でもあります。芸術家としてさまざまな顔を持つハフさんとの共演がどんなものになるのか、とても楽しみにしています。

今回取り上げるピアノ協奏曲第1番は、若きブラームスが「協奏曲とはなにか」という問いに挑んだ初期の代表作です。オピッツさんと演奏した第2番は円熟期の作品なので、この2曲は性格が異なります。ピアノ付きシンフォニーというべき壮大な作品である点は共通していますが、第2番におけるピアノとオーケストラの関係性が「大人の対話」であるならば、第1番のそれはときに「デュエル」のようです。ピアノ独奏はもちろんのこと、オーケストラにとっても大変な難曲ですので、日本フィルの演奏にもぜひ注目してください。

助成:

文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会



公益財団法人アフィニス文化財団